★松尾瑞穂（新潟国際情報大学）

「インドにおける生殖医療技術の適用に関する法的・社会的問題」

生殖ツーリズムの中心地となりつつあるインドでは、在外インド人（NRI）をはじめとする、海外からの数多くの患者が不妊治療に訪れている。また、おもに海外からの患者向けとなっている代理出産だけでなく、インド国内の不妊症患者向けの IVF などの治療も都市部を中心として盛んになりつつある。インドにおける生殖医療技術の適用に関するガイドラインの方向性が、先進国に比べてより実践的で技術肯定的であることはよく知られており、一部の人権団体からの抗議はあるにせよ、先端技術への受容度は比較的高い。本発表では急速に不妊の医療化がすすむインド社会において、生殖医療技術という生命操作にまつわる新たなテクノロジーがどのように認識、受容されているのかを、サブスタンス（継承物質）や宗教観といった、インドの社会・文化的背景との関わりの中で考えてみたい。

★白井千晶（日本学術振興会特別研究員）

「日本における不妊当事者の卵子提供に対する意識」

本報告では、卵子提供・精子提供と関わる当事者がどのような経験をし、どのような課題を感じているのか、当事者の語りに基づいて報告する。現代日本において、配偶子提供を受けて親になること、配偶子提供によって生まれることが、どのような経験なのかを知ることによって、今ある社会のありようが浮き彫りになることと考える。

★渕上恭子（元南山大学南山宗教文化研究所）

「韓国の不妊治療と生殖ツーリズム-『生命倫理法』施行後の代理出産を中心に」

1990 年代後半以降の IT 化に伴う生殖市場の拡大を背景に、韓国の不妊治療が急速な発を遂げて商業化してゆく中で、近隣のアジア諸国との間で代理出産と卵子提供を軸に展開してきた韓国の生殖ツーリズムが、どのように変化を遂げて今日に至っているか、「生命倫理法」施行後の代理出産ツアーをめぐる韓国人不妊夫婦と代理母の動きに着目して考察し今後の韓国の生殖ツーリズムの行方を占ってゆきたい。

★日比野由利（金沢大学）

「タイの医療ツーリズムと不妊産業」

タイはメディカル・ツーリズム発祥の地といわれる。日本からは、美容整形や性転換手術を受ける目的で渡航する人々がいたが、近年では卵子提供や代理出産などの不妊治療を受ける目的も増えた。2001 年から 2008 年の間に、タイの産科医師大学に登録された IVF クリニックの患者数は、年間 1813 人から 3304 人に増えた。2010 年 5 月に代理出産関連法案がタイの法務委員会の審議を通過した。この法案では、代理出産の商業的形態の禁止と依頼者を正式の親とすることが謳われている。しかし、法案審議には時間がかかるとされ、法的に曖昧な状況のまま行われている。当事者同士で秘密裏に行われ、代理母との金銭トラブルや外国人依頼者の子どもが帰国できないケース、あるいは代理母の搾取などの問題も発生している。渡航先の安全性やリスクが十分に認識されないまま渡航治療がなされている現状は問題であり、検証が必要である。